RhD 陰性赤血球輸血後に抗 D を検出した 1 症例

◎木村 俊平[1)]、菅原 杏香[1)]、髙橋 郁子[1)]
公立置賜総合病院[1)]

【はじめに】RhD 陰性患者において RhD 陰性赤血球液を輸血後に抗 D が検出された症例は過去に何例か報告されている．今回，我々は血液疾患により頻回輸血を実施している RhD 陰性患者が RhD 陰性赤血球液のみの輸血後に抗 D を検出した症例を経験したので報告する．

【症例】78 歳，女性．2016 年 11 月より腰椎圧迫骨折で前医に通院していたが，貧血進行と腎機能悪化が見られ，精査目的のため 2018 年 1 月に当院へ紹介となった．輸血歴なし．出産歴あり．

【経過】貧血については輸血での対応となり，入院中には RhD 陰性赤血球液が計 6 単位輸血された．入院時は不規則抗体陰性．多発性骨髄腫の診断となり，外来で月に 1～2 回程度輸血が実施されていたが，2018 年 7 月に不規則抗体が陽性となり，抗 D が検出された．その後も輸血は継続して実施されていたが，同年 11 月に抗 D が検出感度以下となったため不規則抗体は陰性化した．しかし，2019 年 1 月に再度不規則抗体が陽性となり，抗 D が検出された．前回の検出時に比べて酵素法で強い反応強度が認められた．また，溶血所見は認められなかった．

【考察】RhD 陰性と判定された日本人の約 10%で Del が認められる．また，日本人の Del のほとんどが C 抗原陽性であり，本症例でも C 抗原陽性の血液が輸血されていたため，Del 血球によって感作され，抗 D が検出されたと考えられた．患者は輸血歴こそないものの，出産歴はあり，以前産生された抗 D に二次免疫応答が生じて再活性化されたとも考えられたが，2019 年 1 月の方が強い反応強度であったことから，今回の一連の輸血によって抗 D が産生されたとも考えられた．今回，抗 D が検出された際に C 抗原陰性血の選択も考慮したが，血液資源の有効利用のため，ランダムで Rh 陰性赤血球液を輸血したが，溶血所見は認められず，本症例においては Del 血球による溶血は起こらなかったと考えられた．

連絡先　公立置賜総合病院　輸血部
0238-46-5000（内線：3101）